

# 賀茂の祭礼と植物

市 忠顕

京の三大祭りの一つ、葵祭（賀茂祭）ではカツラの枝に葵を搦めて、藪（髪飾り）とする。5月5日の賀茂競馬では、乗尻（騎手）が蓬と菖蒲を身に着ける。また菖蒲で社殿のお屋根を葺く。賀茂の祭に使われる植物について見てみよう。

## （1）カツラ（楓、桂、香木）

カツラ科のカツラ、カツラは香出の意という。微香がある。

「アメノワカヒコ（天若日子）とゆつかつら（湯津楓）（斎つカツラ）」

アメノワカヒコは（国譲りに際し）出雲に交渉に行ったが、シタテルヒメ（タカヒメ）と仲良くなり復命せず。（出雲の）アメノワカヒコ邸の門前に「ゆつかつら」の木があった。雉のナキメがこのカツラの木に止まって鳴いた。（高天原の意志を伝えた。）

ワカヒコはこの雉を矢で射殺すが、ワカヒコもこの矢で死ぬことになる。

タカヒメの兄のアジスキタカヒコネが弔問に訪れるが、ワカヒコと間違われる。

カツラの木は神聖な木で、神の依り代と考えられた。（参考文献1、154頁）

折口信夫の『万葉集辞典』によれば、桂は雌かつら、楓は雄かつら（をかつら）

『古事記』（海幸と山幸の項） 塩椎の神の言葉

「（前略）魚鱗（いろこ）のごと造れる宮室（みや）、それ綿津見の神の宮なり。その神の御門に到りたまはば、傍らの井の上に湯津香木（ゆつかつら）あらむ。かれその木の上にもしまさば、その海（わた）の神の女（むすめ）、見て議らむものぞ。」

『万葉集』1359

向つ岡（を）の若楓（かつら）の木 下枝（しづえ）取り 花待つ い間（ま）に  
嘆きつるかも

『枕草子』40段（冒頭）

花の木ならぬは かへで、かつら、五葉（ごえふ）。

## （2）アオイ（葵、あふひ）

ウマノスズクサ科のフタバアオイ。一名、カモアオイとも言う。

ハート形の双葉の間に、目立たない黒紫色の花を着ける。

落葉性の多年生宿根草。匍匐茎を伸ばして繁殖する。

カンアオイ（寒葵、ギフチョウの食草）は常緑で、冬に落葉しない。

賀茂神社の神紋は「二葉の間に花の着いたフタバアオイ」。

本田家の家紋も葵（長野の善光寺や姫路城で見られる。）

徳川の「三つ葉葵紋」もこのフタバアオイをもとにデザイン化したもの。

徳川家康は三河国の賀茂神社（別雷神社領小野田庄）を信仰して戦勝・出世した。

賀茂別雷神社（上賀茂神社）の主要な建物（現在重要文化財）は第2代将軍徳川秀忠の寄進による。葵祭（賀茂祭）でカツラの枝と共に用いる。葵祭の名前の由来となった植物。

### 葵とカツラを詠み込んだ和歌 『古今和歌集』433

かくばかり あふひのまれになる人を いかがつらしと 思はざるべき

#### 『枕草子』66段（冒頭）

草は 菖蒲。菰。葵、いとをかし。神代よりして、さるかざしとなりけん、いみじうめでたし。もののさまもいとをかし。（後略）

日本古典文学大系 19 の頭註（104 頁）では、「神代よりして」は賀茂神社の故事。「かざし」は挿頭。「もののさま」は葵の葉の形のこととある。「この葵は二葉葵」とも記されている。

葵祭で挿頭しとして用いられるのはカツラの枝と（二葉）葵。

#### 『万葉集』3834

梨棗、黍（きみ）に粟飼ぎ 延ふ田葛（くず）の 後も逢はむと葵（あふひ）花咲く  
この葵はフユアオイか？ それともフタバアオイか？

梨と棗は果樹、黍と粟は穀類。すると、葛と葵の関係は？（野草？）

「黍に粟」は「君に逢う」意を重ねている。「逢う」と「葵」も音を掛けている。

#### （3）ヨモギ（蓬、艾、蒿、蕭、葵）

5月5日の菖蒲の節句には薬狩り（野に出て薬草を集める。または鹿の角茸をとる。）をして、薬草で薬玉（くすだま）を作り、入口の軒先に吊し、魔除けとする。ヨモギには実際に薬効があり、利尿剤、駆虫剤として使われる。お灸に使うモグサもヨモギから作る。芳香もある。（参考文献1、54頁）次項のショウブも大いに関係している。

#### 『万葉集』3921（大伴家持）

杜若（かきつはた）衣（きぬ）に摺り付け 大夫の きそひ獵する 月は来にけり  
（狩衣を身につけ薬狩りをする5月がやって来た）

神山や大田の沢のかきつはた ふかきたのみは 色に見ゆらむ (藤原俊成)  
上賀茂神社の摂社である大田神社のカキツバタ群落は天然記念物に指定されている。

#### (4) ショウブ

テンナンショウ科のショウブで、アヤメ科のハナショウブではない。  
菖蒲湯に使うショウブで、身体を温め、強壮剤になるという。芳香もある。

#### 『枕草子』39段 (部分)

節(せち)は五月(さつき)にしく月はなし。菖蒲(さうぶ)、蓬などのかをり合ひたる、  
いみじうをかし。九重の御殿の上をはじめて いひしらぬ民のすみかまで いかでわがも  
とに しげく葺かんと葺きわたしたる。なほ いとめづらし。

五月の節会には貴賤を問わずショウブの葉で屋根を葺く風習があったことが分かる。上  
賀茂神社での競馬神事の一環である「菖蒲の根合」の神事に残っている。(菖蒲で神殿のお  
屋根を葺く。)賀茂競馬(5月5日の神事)では乗尻と呼ばれる騎手が蓬と菖蒲を装束(裱  
褌)の胸に各自で縫い付け、また、腰にも巻き付ける。菖蒲と勝負・尚武を掛けている。

#### 『万葉集』4116 (大伴家持の長歌)

大君の任(まき)のまにまに・・・・霍公鳥 来鳴く五月の 菖蒲草(あやめぐさ)  
蓬(よもぎ) 藨(かづら)き 酒宴(さかみづき)・・・・(後略)

五月には、ショウブやヨモギが藨として厄払いに用いられた。

#### (5) サカキ(賢木、栄木、榊)

現在神事に使うのはツバキ科の常緑高木のサカキ。古典に出てくるサカキは、落葉しな  
い常緑の広葉樹を「栄木」の意味で広くさした様だ。(参考文献1, 48頁)

大伴坂上娘女 神を祭る歌一首并短歌 (『万葉集』379) (天平五年冬十一月)

ひさかたの 天の原より 生(あ)れ来たる 神の命(みこと) 奥山の 賢木の枝に  
白香(しらか)つけ 木綿とりつけて (以下略)

反歌

木綿豊 手に取りもちて かくだにも われはこひなむ 君に逢はじかも (380)

#### 『枕草子』40段 (部分)

さか木、臨時の祭の御神楽のをりなど、いとおかし。世に木どもこそあれ、神の御前の

ものと生ひはじめけむも、とりわきてをかし。

賀茂と石清水の臨時の祭に、舞人はサカキの枝を手にして舞うしきたりであった。

「柵葉に 木綿とりしでて たが世にか 神の御前に いはひそめけむ」と神楽歌にある。

11月の賀茂臨時祭（冬祭）は4月（現在は5月）の賀茂祭（夏祭）に並ぶ大祭であった。

姫小松（ひめこまつ）の歌 『古今和歌集』1100（藤原敏行）

冬の賀茂のまつりのうた

ちはやぶる かものやしらのひめこまつ よろづ世ふとも 色はかはらじ

この歌がアレンジされ、賀茂祭の舞楽、東遊で東歌（求子歌）として歌われている。

#### (5) マツ（松）

松は常緑樹のシンボルで松竹梅のトップである。常磐木で長寿の象徴とされる。

お正月に飾る門松も、新しい年の年神を迎えるための依り代であった。

松に限らず、さかき、つばき、しきみなど常緑であればなんでも良かった。（文献1）

『万葉集』1043（大伴家持）

たまきはる命は知らず 松が枝を結ぶ情（こころ）は 長くとそ思ふ

『万葉集』990（紀朝臣鹿人）

茂岡に神さび立ちて 栄えたる 千代松の樹の 歳の知らなく

賀茂祭（葵祭）の舞楽、東遊で姫小松が東歌（求子歌）として歌われていることは既に述べた。

『万葉集』228（河辺宮人）

妹が名は千代に流れむ 姫島の子松が末（うれ）に 苔生すまでに

#### (6) イネ（稲）

元旦に行われる歳旦祭では稲穂を飾った新藁の宝船が奉納され中門の頭上に飾り付けられる。勿論、その年の豊作を祈ってのことである。参拝者はその宝船の下を通過して本殿に詣でる。

『万葉集』1353

石上（いそのかみ）布留の早田（わさだ）を秀ずとも縄だに延へよ守りつつ居らむ

『万葉集』1768（抜気大首）

石上布留の早田の穂には出せず 心のうちに恋ふるこの頃

#### (7) ヒカゲノカズラ（日蔭藪、日影蔓、日影）

上賀茂神社ではお正月に楼門の左右の柱に卯杖が飾り付けられている。

この卯杖は新年の初卯の日の縁起物で、桃、椿、空木などを用木とし、ヤブコウジ、石菖蒲（イシヤヤメ）を挟み、ヒカゲノカズラを飾る。『古事記』の天の磐戸の条では、アメノウズメ命が「天香具山の天日影（アメノヒカゲ）」を櫛とし、神がかりして激しく踊ったとされる。

『万葉集』4278（大伴家持）

あしひきの山下日蔭蘂（かづら）ける 上にやさらに 梅を賞（しの）はむ

#### （8）モモ（桃）

3月3日は上巳（じょうし）の節句で、古来祓が行われてきた。上賀茂神社では桃花神事が行われ、桃の花枝がご本殿に納められる。桃は邪気を払う霊力があるとされる中国の風習が日本にも伝来した。『古事記』でも、伊弉諾命が黄泉の国から逃げ帰る時、追っ手を避けるため、桃の実を投げる記述がある。奈良の纏向遺跡で大量の桃の種が出土し話題となったのは記憶に新しい。桃の木は上述の卯杖でも用木として用いられる。

『万葉集』4139（大伴家持）

花の苑（その）紅にほふ桃の花 下照る道に出で立つ少女（をとめ）

#### （9）キク（菊）

上賀茂神社では9月9日の重陽の節供に烏相撲が行われ、その後に菊酒がふるまわれる。重陽の節供に蓬の料理を食べ、菊を浮かべた酒を飲むことは、長寿を願う中国から伝わった風習で、中国の『荆楚歳時記』に記載があるという。（文献1）日本では「菊の着せ綿」といって、菊の花の上に綿を置き、一夜明けてその香りと露の染み込んだ綿で体を拭いて長寿を祈った風習もあった。

『枕草子』39段中葉

九月九日の菊を、あやしき生絹（すずし）のきぬにつつまてまゐらせたるを、おなじはしらにゆひつけて月頃ある薬玉にときかへてぞ棄つめる。また、薬玉は、菊のをりまであるべきにやあらん。されど、それはみな糸をひきとりて、ものゆひなどして、しばしもなし。

京都の他の祭で使用される植物（ツバキ以外は参考文献12）

チマキザサ（粽笹）：祇園祭（八坂神社）で縁起物の粽を包む。

コバノミツバツツジ：鞍馬の火祭（由岐神社）の松明として使用される。

アカマツ：五山の送り火（お盆の祖霊送りの行事）の松明として使用される。

ツバキ：亀岡の出雲大神宮で粥占いの粥を椿の葉で挟んで縁起物とされる。

(10) ツバキ (椿、海石榴)

椿は上賀茂神社の卯杖(上述)でも用木として使われ、邪気を払う霊力があるとされる。松竹梅ももとは「松竹椿」であったのではないか？(梅は外来植物で常緑樹ではない)椿は『万葉集』にも(地名を含め)11首に登場する。

巨勢山の列々椿つらつらに 見つつ偲ばな 巨勢の春野を(坂門人足)

紫は灰差すものそ 海石榴市(つばいち)の 八十の街(ちまた)に逢へる兒や誰  
(この歌は椿の灰が紫染めの媒染剤として古くから用いられていることを示して居る。)

あしひきの八峯の椿つらつらに 見とも飽かめや植えてける君(大伴家持)

我が門のかた山椿まこと汝(なれ) 我が手触れなな 土に落ちもかも(物部廣足)

『古事記』にも仁徳天皇の後、磐之姫が天皇を椿に譬えて称えた歌が載っている。

(前略) 葉広斎(ゆ)つ 真椿 其が花の照り坐し 其が葉の広り坐すは 大君ろかも  
このように、ツバキは古くから日本人に愛された神聖な花木である。

参考・参照文献

- (1) 金井典美著『古典の中の植物』北隆館(1984)
- (2) 武田祐吉訳註『新訂古事記』角川日本古典文庫(1977)
- (3) 日本古典文学大系『万葉集(一)～(四)』岩波書店(1957-1962)
- (4) 久松潜一著『万葉集辞典』弘文堂(1955)
- (5) 折口信夫全集 第六卷『万葉集辞典』中央公論社(1956)
- (6) 日本古典文学大系『古代歌謡集』岩波書店(1957)
- (7) 日本古典文学大系『枕草子 紫式部日記』岩波書店(1958)
- (8) 日本古典文学大系『古今和歌集』岩波書店(1958)
- (9) 建内光儀著『上賀茂神社』学生社(2003)
- (10) 市 忠顕「万葉集につばきを探る」『京都園芸』第101集(2013)
- (11) 市 忠顕「古事記1300年に思う—古代日本人の椿観」『園芸春秋』545号(2012)
- (12) 京都新聞2014年9月18日夕刊(第1面)記事「京文化を支える植物」